



## 令和4年度 全国学力・学習状況調査における本校の状況

令和4年4月19日に全国学力・学習状況調査が国において実施されました。本校では6年生103名がこの調査に参加しました。この調査の目的は、大きく2つあります。一つは、児童が自分自身の学力と学習状況について振り返り、今後の学力向上に意欲をもって取り組めるように意識を高めることです。もう一つは、指導者である教師が、本校における児童の学力や学習状況を把握し、各教科における指導のあり方について検証を行い、今後の学習指導を向上させていくことです。この全国学力・学習状況調査は、①教科に関する内容（国語・算数・理科）、②生活習慣や学習環境などに関する質問紙調査から構成されています。①の教科に関する調査（国語・算数・理科）は、「身につけておかなければのちの学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能 等」「知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力 等」を一体的に問うこととしています。次に、本校における状況についてお知らせします。

### 1 全国との比較における本校の状況

本校の結果は、国語・算数・理科いずれの教科も全国の平均を大きく上回っています。いずれの教科もすべての領域で高い正答率となっています。さらに、3教科共通して特に優れているものが、「思考力、判断力、表現力等」であり、記述式で出題されている問題の無解答率が極めて低く正答率が高くなっています。児童自らが問い主体的に学んだり、友達と学び合おうとしたりする姿勢が理解を深めることにつながっていると考えられます。

平均正答率	国 語	算 数	理 科
全 国	65.1	62.6	63.4
山梨県	64	62	62

国立教育政策研究所HP「令和4年度全国学力・学習状況調査報告書・調査結果資料」より

### 2 教科に関する内容より

#### (1) 国語科

##### ①主な成果と課題

まず、成果としては、今回問われた全ての出題に対して、高い正答率であったことが挙げられます。これは学習指導要領で示されている「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力が高い水準で身に付いていることを表しています。その中でも特に、「必要なことを質問し、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉える」ことや「互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、自分の考えをまとめる」ことといった、「思考力、判断力、表現力等」の「話すこと・聞く

こと」の資質・能力を問われた問題で、全国平均を大きく上回る非常に高い正答率となりました。さらに、今年度の成果として、若干は認められるものの、無解答率が極めて低いことも挙げられます。昨年度、課題として挙げた無解答率が数値上改善傾向にあることは、学校全体の成果といえます。

次に、課題としては、調査結果から、全国平均を上回る正答率を示しながらも、「書くこと」の領域における「共有」の資質・能力に改善の余地があることが分かりました。具体的には、「文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見つける」ことを今年度内に意識的に指導を行い、改善を図っていく必要があります。

## ②主な改善点

今年度の調査から明らかになった本校の課題に対しては、その課題に応じた授業を行うことで改善を図っていきます。具体的には、「文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見つける」といった「書くこと」の「共有」の資質・能力の育成に焦点を当てた授業の実践です。この「共有」の資質・能力については、学級内で書いたものや考えたことなどを出し合うといった学習活動を通して、「自分のよいところを見つけること」や「友だちと自分との違いに気付くこと」、さらには「自分の考えを広げたり、深めたりすること」などがねらいになっています。ICTの活用も積極的に取り入れるなど、目的に応じて、多様な方法で他者と関わる場を授業の中で意図的に設けることが考えられます。そして、そのような場の中で、発達段階に応じながら、自分のよさや、コロナ禍で機会が失われた他者と関わることのよさに気付くことが改善のために必要であると考えています。

「共有」の資質・能力に関しては、「書くこと」に限らず、「話すこと・聞くこと」や「読むこと」といった国語科内の他の学習においても育成を目指すことができます。さらに、国語科の学習を土台としながら他教科等でも育成を図ることも考えられます。

## (2) 算数科

### ①主な成果と課題

すべての領域において高い正答率であり、全国平均を上回っています。特に「図形」領域において全国平均よりも高い正答率を示しています。問題別にみると「示されたプログラムでかくことができる図形を選ぶ」問題で、全国平均よりも16%以上高い正答率となっています。

観点別では、すべての観点において高い正答率であり、特に「思考・判断・表現」で高くなっています。選択式と短答式、記述式とありますが、特に「記述式」において高い正答率を示しており、無回答率が極めて低くなっています。

課題点は2つあります。それは、「数と計算」領域と、「変化と関係」領域の「割合」の問題です。「数と計算」領域の本校正答率は全国平均を上回る程度で、その差は少なくなっています。また、「変化と関係」領域の「割合」では、「果汁が含まれている飲み物の量を半分にしたときの、果汁の割合について正しいものを選ぶ」問題において、本校の正答率は全国平均を下回りました。

### ②主な改善点

今回の調査では、全ての領域において高い正答率が見られました。基礎的・基本的な知識・技能が身に付いており、それを活用する項目においても高い正答率が見られました。また、記述式の問題において無回答率が低かったことから、児童自らが問い、友だちと学び合おうとする姿が高い正答率に結び付いたと考えられます。

一方で、課題点として挙げた「数と計算」領域については、日常生活の問題を解決するために、目的に応じて数量の関係に着目し、数の処理の仕方考えることが大切です。

また、「変化と関係」領域の「割合」において、割合を用いて問題を解決するためには、問題場面の数量の関係に着目し、基準量、比較量、割合の関係や、伴って変わる二つの数量の関係について考察して、数学的に表現・処理することが大切です。そのために、日常の具体的な場面に対応させながら割合について理解したり、図や式などを用いて基準量と比較量の間接的な関係を表したりする活動を充実させていき

ます。継続的にこれらの活動を行うことで、数学的に考える力を伸ばしていきます。さらに、日々の授業が算数場面だけに留まらず、日常生活にも活用できるよう日常の生活場面に即して判断したり活用したりする活動を設定していきます。

### (3) 理科

#### ①主な成果と課題

すべての領域において高い正答率であり、全国平均を上回っていました。特に「物質」を柱とする領域において、全国平均よりもかなり高い正答率を示していました。問題別にみると「鉄棒に付着していた水滴と氷の粒は、何が変化したものかを書く」問題で、全国平均よりも23%以上高い正答率となっていました。

観点別では、すべての観点において高い正答率であり、特に「思考・判断・表現」で高くなっていました。選択式と短答式、記述式とありますが、特に「記述式」において高い正答率を示しており、無回答率が極めて少なかったです。

課題点は「エネルギー」を柱とする領域でした。全国平均を上回ってはいたものの、その正答率は、全領域の中で最も低い結果となりました。また、「生命」を柱とする領域は、全国平均を上回る正答率を示しましたが、全国との差は6%と、全領域の中で最も少ないものとなりました。

#### ②主な改善点

今回の調査では、全ての領域において高い正答率が見られました。基礎的・基本的な知識・技能が身に付いており、それを活用する項目においても高い正答率が見られました。また、記述式の問題において無回答率が低かったことから、理科における科学的な事象に対して自ら問題を見だし、その解決に向けて主体的に取り組もうとする姿が高い正答率に結び付いたと考えられます。

一方で、課題点として挙げた「エネルギー」を柱とする領域については、他の「生命」「地球」等の領域と比べると、子どもたちが日常生活との結び付きを感じにくい領域であることが理由の一つとして考えられます。子どもたちの観察や実験が日常生活とかけ離れたものになってしまわぬよう、日常生活と関係付けながら考察する場面を設定したり、日常生活とのつながりを実感できるような事象を教師が提示したりしていくことが大切であると考えています。

また、「生命」を柱とする領域においても、教科書の文章や写真だけに留まらず、可能な限り実物の観察する場面を設定していくことで、理科において最も大切な実感を伴った理解へとつなげていきたいと考えています。

## 3 質問紙調査より

### (1) 質問紙調査の主な特徴

質問紙調査は、児童の学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面に関する質問に、児童自らが回答する調査です。児童の更なる成長につなげるという観点で、附属小学校の質問紙調査の結果を分析しました。本校において大切にしたいと考えるいくつかの項目を抜粋し、全国平均との比較を以下に示します。詳しくは国立教育政策研究所ホームページにも「令和4年度全国学力・学習状況調査報告書【質問紙調査】」として掲載されていますので、そちらもご覧ください。

#### ○自己有用感等

「人の役に立つ人間になりたいと思いますか。」「人が困っているときは、進んで助けていますか。」という質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答している児童が多く、助け合いながら生活する価値や、自己から他者への思いやりの心が育っていることが読み取れます。また、「自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしていますか。」という質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答している児童が多く、主体的に、かつ意欲的に、課

題を解決しようと努めている、といえます。

### ○基本的生活習慣等

「毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか。起きていますか。」という質問に対して、「している」「どちらかといえば、している」と回答している児童の割合も高く、基本的な生活習慣が定着していることが伺えます。基本的な生活習慣が身につけていることが、学校における学習への意欲、並びに学習内容の定着度をさらに高めています。衣食住は生活の基盤であり、豊かな学びの基礎となる部分です。学校と家庭との連携・協力を今後とも図っていきたいと思います。

### ○学習・読書習慣等

「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか。」という質問に対して、「している」「どちらかといえば、している」と回答している児童の割合や、平日、休日ともに「学校の授業時間以外に勉強する時間（学習塾や家庭教師を含む）」や「読書をする時間（教科書や参考書、まんがや雑誌を除く）」について、全国平均を上回っています。さらに、「新聞を読む頻度」も、全国平均より高いことが分かりました。これら学習習慣や読書習慣等の定着が、高い学力並びに高い学習意欲につながっていることが分かります。

## （２）質問紙調査からの改善点

確かな学習・読書習慣等に支えられた高い学力・学習状況にあり、課題に対して努力することができる児童が多いことが本校の児童の特長といえます。そんな児童であるからこそ、「自分のよさやがんばりを自分で認めてあげられること」と「失敗から学び、難しいことでも挑戦し続けること」の意義や価値を児童自身が自覚できるようにしていきたいと考えます。高い目標に向かって努力できるからこそ現状に満足できないことや他者と自分とを必要以上に比べてしまうことがあります。しかし、全国的に見ても高い水準にある児童一人一人の現状や目標に向かうプロセスを積極的に認めたり、価値付けたりすることで、児童が自己肯定感をより高めていけるようにしていきます。そのためには、学級の友だちと互いを肯定的に認め合えるような場を意図的に設定することが考えられます。また、自分が努力したことやがんばったことなどが相手に伝わったことが確かめられたり、達成感などとして感じられたりすることができるような場を工夫していきます。

また、失敗など、うまくいかなかった原因を分析したり、原因となったことがなぜ起きてしまったのか、といったプロセスをふり返ったりするなどして、より高度な課題に対して、粘り強く取り組んでいこうとする姿勢も身に付けていけるようにしていきます。そのためには、失敗を肯定的に受け止めながら、粘り強く取り組むことで課題が解決されるような学習を展開することや、児童一人一人で考えるのではなく、学級全体で難しい課題を解決して成功体験を得て、それを個々の児童が共有する、といったことも考えられます。

## 4 ご家庭の皆様へ

質問紙調査からは、附属小学校の6年生が主体的に日々の活動に取り組み、目標に向けて努力を重ねていることが伺えます。こういった積み重ねが、理解をより深め、学習内容を定着させることにつながっていると考えます。さらに、これらの学びの様子を自らも振り返り、知識・技能のみならず、学び方も価値づけていくことで、より自己肯定感や活動に取り組む態度を育てていくことができると考えます。そういった態度を基盤としていくことが大切であると考えます。今回の成果と課題を踏まえ、今後も児童の成長のために学校と家庭が連携して取り組んでいきたいと思えます。